桂園丹譜

五

二女14
583
5

二14
583
5

帝国図書館蔵

桂園竹譜巻之五

すゝ　やまたけ

すゝ一名みすゝ一名すたけ一名やのたけ一名やまたけ漢名を篁箭とつゝ筍をすゝたゝ名のこ漢名を篁一名篁箭萌とつふこきを雪國の山に生ずる小竹にして信濃に多し詞草小花その葉篁に似て幹高く本根屈曲ずゝ本草一家いへゝまゝ加賀越前等に産するものハその葉篁ゝゝゝとも至て長大ふして葉辺変白せゝ幹ハ矢竹に似て毎節平らかふして高さ一丈許大さ指のこゝゝし又肥前の大村にゝも出るものハ其節間殊に長し和漢三才図会即一物

ゐを歌ふハ大和の吉野山城の葛島紀伊の熊野等の諸
山のものゝ其名高しされど大古の時五百箇野薦と日本書紀
いへるハ山生のものゝみハあらで此筍籜青緑まじりて其
籜拓るゝときハ色白しをもつて北國地方にそハ大竹まれ
なるを以て土民古より此筍を採て雪花菜と混とまし
へて藏し置て食用とせを西土にもこれを周禮に簜菹雁醢と
いひ爾雅に簜箭萌といひるハ即此竹の筍なれハ彼土
にても此筍を食用に供せしゝハ由て来ること久しき
事なを扨西土にて矢に作れる竹數種あるといつとも
古より會稽に産するゝの其名高く即今のもて竹に

て山居賦にいゝるゝ箭竹ありて和漢三才圖会にいゝ
るゝ大村の箭竹第大於島篠といゝる暗合のゝものなを
蓋し大村の産ハ此竹のその所を得て本根といゝるも
屈曲せず矢に作るに至てよろしきものなるゝ
なりと古より皇朝にて矢に作るゝハ尋常の竿箭に
て此箭箭を用ゐるこゝとときつゝ允箭箭ハ諸国山中に
極めて多きものなれど今より後ハ肥前人の用ひる
なるゝ此竹を以て矢に作りあるゝその勁強西土會稽の
産にも劣らざるこゝを明らかなり

日本書紀神代巻云使山雷者採五百箇真坂樹八十玉籤野

槍者採五百箇野篤八千束鐵

萬葉集巻第二 相 云水篤刈信濃乃真弓

風雅和歌集云たのもかのわらきを奉らきてこれハす
すゝけのいろもとなるきてと云云

古今著聞集云石泉法印鞆負の別當にて被ようをを
多くまゐらけたりを或人の詠一つのそをを此をハ
鞆負の福をてさふらふをてまさむのてめさ
るか

和訓栞云筍の皮をもつてつを螟蛉ハ
鞆負の福とつひなりつを今白を責一つをもても煤を

寄てよめるか

和漢三才図會云箭篤竹箭大於馬篠而竹似鳳尾竹節間
長肉最硬用竹箭篤甚佳出於肥州大村

本草一家言云一種似箭而幹高丈根屈曲筍甜可食代赦
冬蓋養食俗呼鈴竹箭類也

用藥須知云。諸藥語正文 又、タケノコ箭竹蔕也 出禮記内
則 多作箭

周禮職方氏云東南曰揚州其利金錫竹箭

爾雅釋地云東南之美者有會稽之竹箭

山海經云竹山云〻其陽多竹箭篠也

又云𦼮次之山云〻其下多竹箭

又云翠山云〻其下竹箭

又云暴山云〻其下多竹箭箘簵

山堵賦云二箭珠葉箭大葉云〻

華夷花木考云篠幹小節長葉大堪作箭俗呼曰箭竹

会稽縣志云箭竹別名曰篠幹直可以為矢所謂会稽竹箭是也

邵武府志云篠竹一名箭竹幹小節長可以為箭周禮揚州之域其利金錫竹箭是也

東陽縣志云山竹幹細而節長可為筆管筍味極佳土人採

之入城市、即爭取之、所在皆是箭竹、中実如箭、茎甚大、俗名箭箬、利用実多

筍譜云一名篁、自注云箭竹萌、即會稽箭竹也

又云周禮揚州之利竹箭、亦有篁萌之別名矣、蓋成數実物惟筍竹萌也、皆四月生也

釋名

ちく 新古今集 凡雅集

冠鮮芳小古事紀の須々鈎と神代紀よ踉蹌鈎と書たるハちくちく意也同紀よ美人驚而立走伊須々岐伊岐ハ發語下の伎ハ氣利反少て碎ちく

ちくちくとたちはしる也

此外祝詞なとふとを多しとと見えたるとされとを、ハ此
竹風吹く時ハ大葉細竿の故を以て常竹ようとハをを、
ろきぬるを以て名つけしなるつゝ又紫ようをを、ハさ
さと同意にて物の細ふなるをいへる古語なれを鷦
鷯をさゝき雀をもゝめをいへる類なるつゝまを凡
雅集にも欲竹ゝをいへるふなれをもゝハをを篇
の名ふて此篇の細ふなるをさして云へ成なるて
みをて萬葉集
みハ三熊野なるのみを同しくなめなる詞なれを本
書ふ水薦を書なるハ假借なを

のを、日本書紀
本書ふ野薦の字を用ゐしようれを即野生のをのを
ふなるを
すゝたけ本草一家言
本書ふ鈴竹の字を用ゐなを即假借なを
やのたけ和漢三才圖會
此即箭篁竹の義なを
やまたけ越前方言
案ふ東陽縣志に山竹の名あを即和漢通名なを
箭竹 山居賦

竺葉箬ハ似て其籜箭ハ作ル〳〵故ハ名つく

篁 周禮 爾雅

說文云篁竹萌也从竹黃聲案ハ部云从心台聲口部云台从口呂聲ニこゝにて篁の字の古聲と押ス

一〳〵

箭萌 筍譜

僧贊寧曰初生謂之萌

正誤

日本書紀云野薦

或人曰薦ハ篤の誤ならん〳〵今案說文ハ薦獸之所食

草也从廌从艸古者神人以薦遺黃帝ニ曰何食何處曰食薦夏處水澤冬處松栢ニ見えたれを薦ハ即竹の名ならんを或人の說ニ云る如〳〵されとも竹譜詳錄ハ篤竹一如紫竹但色正黑耳ニ云ハ也て竹とハその物異なるを爾雅考の標注ニ也て竹ハ五の竹の類ニていとちいさくて黑き竹なるを四国なとにてそもそもといふといつるハ蓋し蘆胡淡竹の類なるへし凡ハ竹こたん竹ハこのすゝ竹とその枝葉全く一様ハしてたゞ其本幹ニ紫黑班数あるものをれを古ハ之をと押るつてもゝとハいひしものなるつきみや櫛

考ふるに

篇遲久 沙古丹竹

篇遲久ハ斑竹の字音にて和漢通名なり其一名を花斑竹一名斑波竹一名研竹一名箭竹ともいふこれも數種あり今こゝに竹一名沙古丹竹一名豊後竹一名玳瑁竹一名鼈甲竹こゝに竹一名まだら竹一名らん竹

一名沙古丹竹一名豊後竹一名玳瑁竹一名鼈甲竹こゝに

へる其高大抵五六尺にして往三分餘毎節相去ること四五寸枝ハ中幹より以上に生じてもつて獨枝ふして

その高さ本幹とおなじ或ハ四枝或ハ二枝なりもあれ

ども葉ハ其梢ばかりにつきて六葉を以て一系とす

或ハ四葉五葉のものハ下の一二葉の枯き落しものふ

てその葉の長さ一尺一寸廣さ二寸八分許又肥地に植

るものハ長一尺五寸餘廣さ三寸二分許に至る葉の正

中にハ尋常の能笹に同しく葉元より葉先に通じて一

縱一道あり その左右まゝ十二三道の細縱理相並ひて

其上葉本より葉先まゝ行る 斗薙蝦夷地方に産する物

ハ風雪に壓もれて本根のまゝ彎曲して狀弓彎の如

くなれども他国に産するものハ立のうるはしくして毎節

下部黑色にして斑文あり その斑毎幹上節より深出て

下節に至るまれにも大方ハ半にふして一節間にて

紫黒色なるもの少なく、まゝ此竹中幹五尺以上にたゝ
青色ふゝして尋常の熊笹に異なり、くく斑文なし此種は今
小笠原相州箱根島の別莊にあるもて最百万幹池辺
に叢生し麗しく最愛すべきもの白河侯大阪の下邸にも
多し云ふ即延喜式及び和名抄に載る所の斑竹也是竟
この斑竹は竹の一種斑紋あるものなれども肥地に
生ずるものは其高一丈許に至るものあるまたすく竹
と同じく採て以て竹箭となすべし故に華夷花木考に
斑竹杭產者堪作箭と云へり本邦にては遠江延喜式豊後
和漢三才図会 載和肥後土佐その餘諸所に出つ本草綱目啓蒙 一種是

竹一名苦竹一名湘妃竹一名淚竹一名湘竹一名靈竹あ
り此竹方時每歲工苦錢剤之甚小土竹斫竹、浸水用草籠
洗出苦錢則常是爛斑可愛此真湘中斑竹也と 崔豹古詩註
いつるハ本邦にても日向及び相模の箱根山中にあるもの
目史草木昆虫考 いつるまた生於江湘間者其斑直一淚痕無暈
桂海虞衡志 產於吳越諸山者其斑紋雖不及古稱湘妃然作器
具所用最廣 秘傳花鏡 また赤錢竹、真珠式雲竹、清白竹、龜紋竹
及び道州斑竹、顧家斑竹、電斑竹、舍利玉斑竹、あるも共に和
產にて詳らかなる
延喜式内藏寮 云斑竹千六百隻 遠江国 牙笛

和名類聚鈔竹類云斑竹、兼名苑云、一名湘竹、此間斑竹
音篇遥久
和漢三才図會云案虎彪竹出豊後姥之嶽、篠竹之類而竹
黄白色、有黒斑紋、微似虎皮之紋、故名之、用為節杖烟筒佳
大和本草云斑竹漳州府志云節間有斑文、似湘妃淚痕所
錄者今案本邦處ゝゝ ヨリ
本草一家言云潯州竹一名斑竹、和名帝斑竹、薩州地方産
之、土人呼鵝胡淡竹
本草綱目啓蒙云斑竹ハ皮上ニ黒斑アルヲ云、豊後、越前
肥後、土佐其餘諸州ニ出ル、大小ノ別アリ臨桂雜識ニ品
類ヲ詳ニス 唐山朝鮮ヨリ来ル杖及机卓等ニ作ル者偖

リ多シ
案ニ斑竹法ハ事林廣記ニ硫砂五十研細絲磬三十
研膽礬二十研石灰五文一處再細研入礦灰汁一處調
合點之候乾摺洗斑痕不落ニテ有之
東遊記云秋田津軽辺極めて北地ニ而松なく竹多く云
ゝ熊笹甚多し深山ハ皆是なり故地なりとハ根曲り竹と
ゝ蝦夷地にてシヤクンこゝ云ふ蝦夷ふしなるハ尤大
きくして四ツ長八九尺太きも杖程なるもの多し
國史草木記考云斑竹今好事のもの筆管となせしも
のゝふしにて諸山或ハこれなきもの古ハ我が小ある事を知ら

を漢隠居詩話に竹有黒點謂之斑竹非也湘中斑竹方生時每歴上苔錢封之云々此真斑竹也と見えたる槃名也かゝ日向の國に住し時端山麓の内に斑竹を得たりしかけに漢説と同しまた相模國箱根山中のものも亦左のごとし

華夷花木考云斑竹甚佳即呉地称湘妃竹有其斑如淚痕抗産者篠幹小節長葉大甚作簫信呼曰簫竹

案ずるに抗産斑竹幹小葉大とゝ〻〻ハ即汝古丹竹に的当のものなり

竹譜詳録云暈竹出湘全閩嶺南皆南有之等類苦竹節長大小不等初竹青上生白苔点漸々著竹上成斑及洗去苔靡葉褐斑暈層々間雜殊可人意筍不入食品如他斑竹止一沁痕無疊也全州西猛洞中及鬱林山中出者竹色正白斑花尤多明最為上品接海虞衡志謂之斑竹云桂林屬縣皆有之所記畧同

又云赤箋竹真珠竹雲竹雨點竹清白竹龜紋竹右已上六種皆暈竹之類彼人但以斑花之似者輙取以名耳

又云苦竹寰宇記云信州貴溪水南流上源數十里生苦竹苦痕點暈狀如琅玉幹直可為杖

又云淚竹生全湘九疑山中博物志云舜南巡狩不返葬於

蒼梧之野、堯二女娥皇女英追之不及、至洞庭之山、淚下深竹、成斑、妃死為湘水神、述異記云、舜南巡葬於蒼梧、堯二女娥皇女英淚下沾竹、文志曰之斑、亦名湘妃竹

又云道州斑竹生高巖、小於箭、文如螺旋不雜

又云顧家斑竹、述異記云、姑蘇之境有陸家白蓮顧家斑竹、亦猶花有魏紫姚黃之稱

又云電斑竹出甯州、地理志云、雷川貢電斑竹、即此物也

又云舍利王斑竹、輕有疵文、六帖云、昔西域舍利王敬樂、有大小匏琴、皆以此文斑竹為之、取聲於匏、以合律

太平御覽云斑竹、博物志云、河庚虞帝之二女、啼以淚揮竹、

竹盡斑、今下鳥有斑皮竹

北戶錄云、湘潭縣十二月食斑皮竹筍、諸筍無以及之

吳錄云、馬援至荔浦見冬筍、名曰苞筍、博物志云、斑皮竹、堯女以淚揮竹、盡斑也

代檀集云、靈竹、俗傳孟宗泣斑竹也

與猶便覽云、湘竹斑細、而色深、有暈中一點紫、作簫管最佳

蒙書詳注云、斑竹即舜地產、湘妃竹者、具斑如淚痕、抗產者不如、亦有二種、出古辭者佳、出陶屈山中者次之、土人裁為筋、甚妙

學圃雜疏云、斑竹筍不中食、大而鮮澤者、色用可亞湘妃、亦

佳竹也

日詢手鏡云、斑竹有二種、出古辯者佳、出陶盧山中者次之、余携數竿、乃陶盧者、不甚佳、吳人甚珍重、以之為扇材及文房中秘閣之類、丈許值錢二三百文

格古要論云、湘竹出廣西、斑細而色淡、有暈中一莫紫與蘆葉上斑相似、作籌管最貴

群芳譜云、滇之新化州山中生細竹、長者十餘丈、本粗而末細、其上有白點蘚点之、則斑痕如湘竹、斷以為箸甚雅

致局全書云、斑竹又名斑皮竹、長短大小不等、可作扇邊、又与紫竹並取、充文房諸具之用

博物彙書云、外紀蘇東坡千富川、嘗以篩墨洒竹上、而枝葉皆有墨痕、所生新竹皆然

江西通志云、蘇東坡謫黃州、過瑞邑、據筆賦詩、洒墨于竹而成斑、故潯多斑竹云

江陵縣志云、斑竹質脆、具文斑

福州府志云、斑竹三山志名為研竹

八閩通志云、斑竹永福縣鶴洋多產之、差及湘江者

海澄縣志云、斑竹節間有斑文、似湘妃淚痕所餘者、又有一種名湘滿竹

靖江縣志云、斑竹有紫斑、一名湘妃竹

常熟縣志云質脆而有斑者為斑竹可以扇用

懷寧縣志云斑竹篾不製器

金壇縣志云斑竹相傳自湘江來猶是湘妃淚灑遺竹

安慶府志云斑竹有黑斑類湘妃竹

太平府志云斑竹一名湘妃竹青幹有紫斑文可治器

新城縣志云斑竹一名湘竹可作器用

番禺縣志云斑竹如紫竹青中間有斑點而無螺紋不如湘竹

台州府志云斑竹斑暈紫星而點大又歸越竹

釋名

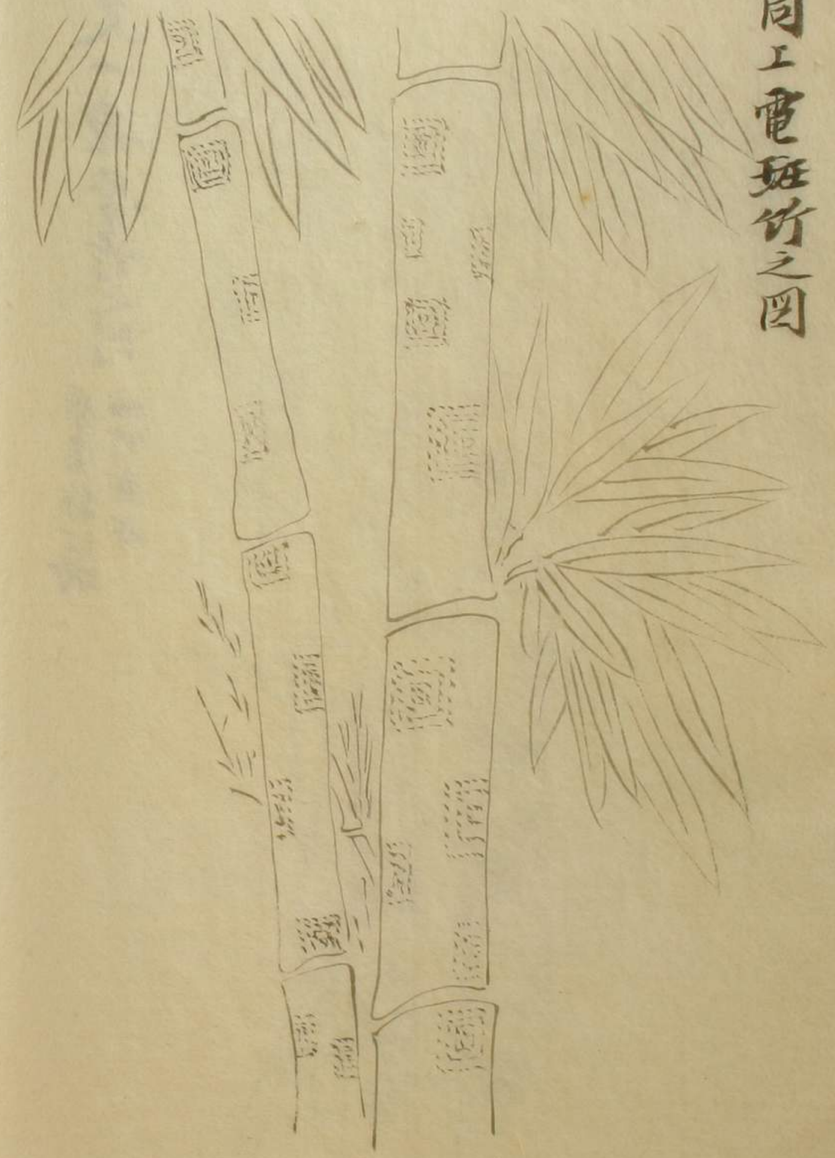
東藪竹譜所載斑竹之圖

同上暈竹之図

又一種暈竹之図

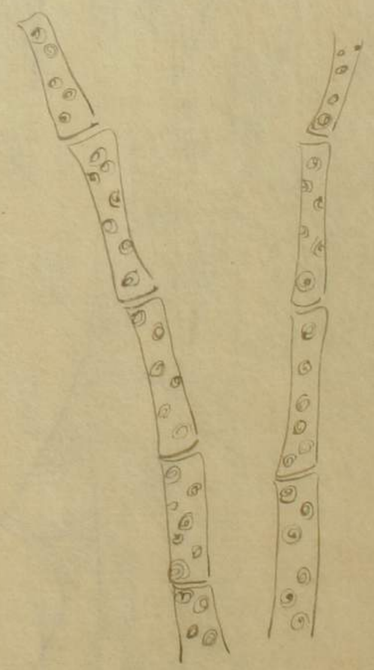
原書称江浙斑竹者非

同上電斑竹之図



同上亀紋竹之図

竹譜詳錄所載暈竹之圖



篇遲久 和名類聚鈔

順曰此間斑竹音篇遲久案文斑篆文辮ニ作ルこれ正文なりとられハ說文ニ辮从刀辮聲辮从方辮聲辮从広辮ニあるかなりとも玉篇ニ知るを俗の辮斑ハ从ひ斑ハ作ると具字斑ニ相似たりあるとて玉篇以下の字書ニ二字混同して遂ハ斑と以て布還切となるハ誤まりなるとて斑布還切ハ漢音ハ呉音也なるとつふ說もまゝ古聲ニたるの了るふあらんや

沙古丹竹 本草一家言 東遊記

案ニ沙古丹ハ暹羅の地名なると具地多く此竹と産を

改ふ名つく或人の説よシヤコタンをシヤコハンの誤
なりとこつつをうれハ廣東新語ニ蘭生武班謂之
鷹胡班と見えたりかゝるをていいるあらんその実ハ
シヤコタンの地名なる事を知らさる也和漢三才図
會云義経奔走蝦夷島民皆欲服終天年死其地曰所胡丹
建神祠甚崇信毎ニ称南無義経ここれなりて沙古丹ハ
地名なりと明らかなり

ことらふたけ 庶物類纂、和漢三才図会、大和本草
本草一家言、家言本草綱目啓蒙

ことらふハ即虎班の義なり本草一家言ハ其二字を
用ゐ和漢三才図会ハ虎彪の字を用ゐたり彪亦

虎の班ありといへるなり又庶物類纂ニことらふ竹ハ
越後の方言なりと見えたり

ことらたけ 本草綱目啓蒙

小野蘭山曰ことら竹ハ薩摩の方言なりと沙邨ことら竹
たけの中異なり

またらたけ 全上

またらハ即班字の義なり

豊後竹 全上

あのめさゝニ同名なりまた北竹豊後の晩ヵ嵩ヵ産
ちゝさゝハ和漢三才図会ニ見えたり

らうたけ 目上

今俗らをたけといへるハ即らう竹の訛傳なるを小野蘭山曰光過ハ東天竺の國なるを占城ハ近く安南の西北ハ海を其國斑竹數品あるを最初此竹あて烟管を作り渡を故ハ今烟管ハ用る細竹をもつてらう竹と云

玳瑁竹 和訓栞

また同名あるを

鼈甲竹

上野の方言なるを凡玳瑁といひ鼈甲をつふハ共ハ斑文あるをいふなるを

斑竹 拾海虞衡志竹譜詳錄漢隱居詩話韋書詳注八閩通志江陰縣志安慶府志

說文云辨駁文也竹譜詳錄云斑竹處〻有之其類最繁凡生斑花者皆然斑花或大或小或匀或斜不等或皇暈或單暈色或深淺各隨出產凡土變易

斑皮竹 大平府覽北戶錄書敘指南

花斑竹 四川總志

研竹 福州府志引三山志

案玉篇ハ研摩也とそくなるを研竹ハ蓋し苦竹の名ハして若を摩研して斑を出を意なるを名付しなり

暈竹 竹譜詳錄

吉竹　寰宇記

湘妃竹　竹譜詳録　太平府志

淚竹　竹譜詳録

湘竹　新城縣志

翠竹　代檀集

赤箭竹　竹譜詳録

案ずるに篇ハ箭子踐切老聃性と見えたりと此箭ハ[illegible]れ
ニハ異なりて斑文の大さ錢の如くなりと以て命せ
[illegible]多みて竹尉ハ淺ハ加へしものなり

真珠竹　全上

十

雨點竹　全上

雲竹　全上

清白竹　全上

龜紋竹　全上

案ハ舟州図竹ハ載る所の龜紋竹ハ毎節間篠促ハ
て其狀龜甲紋ハ似たりと云ひ此龜文竹ハ斑文の狀
龜甲ハ似たりとなり

道州斑竹　全上

顏家斑竹　全上

電斑竹　全上

舍利子斑竹 全工

正誤

本草一家言云瀟湘竹一名斑竹云〻

案ふ瀟湘竹ハ別種にして其種二種あるといへども共

に斑文あるものゝあらざるなり この瀟湘竹ハ湘妃

竹の誤写なるべし

東遊記云秋田津軽辺熊笹多し彼地にてハ根曲り竹と

いひ蝦夷にてハシヤコタンといふ

案ふ熊笹ハシヤコタン竹とハ相似て別種なると一

ツになるもハ誤りなるべ

博物志云堯帝之二女常啼以其淚揮竹〻盡成斑

案ふ斑竹の斑文あるハこれ天稟ふして堯女の淚か

かるし淚ふ此竹をしめして斑文を生せしあらんと

疑ると博物志ハかくいへるハ上世一時の佞談と其

まゝふ三ヶ世しなるべいまゝ江西通志ふ蘇東坡の黄

州ふ謫せらるゝ時筆を取て詩を題し墨を竹上ふ洒

きしゝ遂ふ斑竹となるといへるハ同し類の佞談

なりとなるべし佞談なるゆゑ蘇東坡の斑竹ハ叔

父き堯女の淚かゝるとしこいふ斑竹ハ蓋し疊暈なき

ものゝ自然と諸書ふ疊暈あるものゝなるべしハ恐く

ハ非ならんいつかの光女の淚痕ゝ点々てその斑畳
暈となる理あらんや

篇竹

篇竹一名簳一名簳苛一名箭竿一名竿簳一名湘箭一名
氣ハ箭竹の類にして一尺の間に數節ありその葉太さ餘
の如く（竹譜）きゝ扇の如し（本草綱目）此竹ハ詩衛風にいゝる淇澳の綠竹（竹譜）にしてその葉ハ今長崎に来れる商船の
箬葉に同しく篷に作れるものなり邦産絶てなし此筍
ハ魏の時漢中の太守王圖ゝ奉ゼしものにて冬生ず
（竹譜詳錄）或ハ夏秋にいつゝ又ハ冬夏に生ず

（五雜組）いつゝこれハ其風土の寒暖にもよりてそれ
〻に遲速あるものなれ別種にハあらず一種長節
のものなり郭璞注山海經に今漢中郡出篇竹厚肉而長
節根浮筍生地中といへるハ王圖ゝ奉ゼしハ蓋
し此竹の筍にてその密節なるハ即江漢の産なり扶後
漢書殷商傳に伐淇園之竹省矢百餘萬とあるものの
淇園ハ殷の紂王の竹箭園なれ此竹を以て矢に
作れるもその由来久し又ニの種ハ古より邦産絶てな
きものなれども既に長崎にて此葉をもちゐて携
来るのみにこれあるのみなれ詩の綠竹ハ即此篇竹

知ることを世に知らるの少なきが如くに多識の一助ともなさんとてかくい物せしなり

竹譜云篁亦箘簵概節而短、江漢之間謂之簳竹、自注引山海經云具竹名簵生非一處、江南山谷所饒也、故是箭竹類、一尺數節、葉大如履、可以作籬、亦中作矢、其筍冬生、廣志云龜時溪中太守王圖每冬獻筍、俗謂之簳筍

又云根深耐寒、茂彼淇奥、自注云、北土寒水、至冬地凍、竹根類淺、故不能植、唯簳根深、故能脫生、淇園衛地、殷紂王竹箭園也、見皇覽志、淮南志云、鳥鞫之弓貫、淇衛之箭也、毛詩所謂瞻彼淇澳、綠竹猗々是也

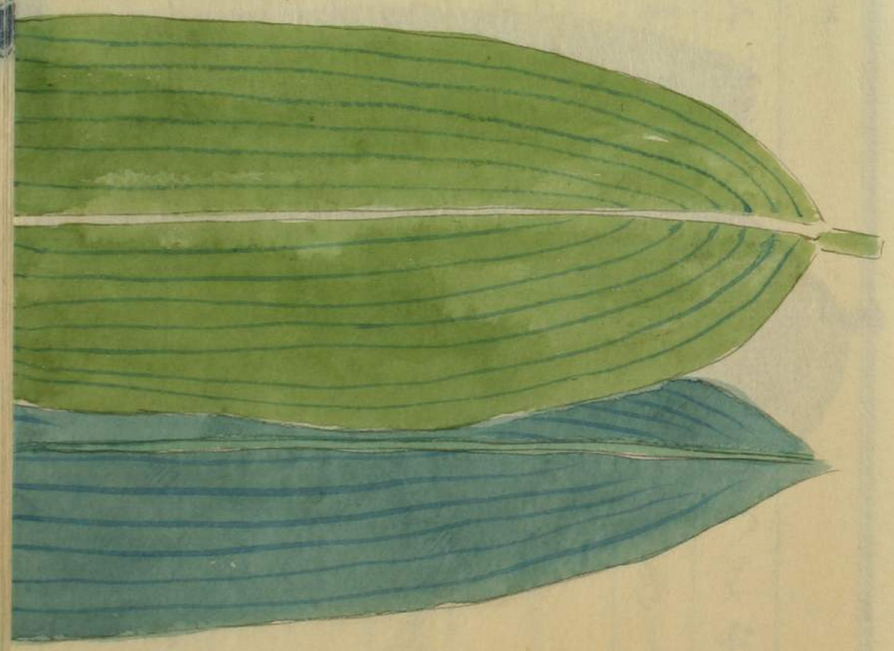
筍譜云鄙竹筍、自注云、長節而深根、筍冬發、皆生鄉人掘土取筍、廣志作篇竹、可作屋椽、山海經同也

又云篇簳、自注引竹譜云、江漢間謂之笋簳、一赤數葉々大如履、可以作籬、今詳笋如履、即王彪之閑中賦云、湘箬也、其筍亦不大、止是箬葉異諸竹耳、又此竹與鄙竹同也

立雜俎云篇竹細竹也、長數尺許、其筍冬發生可食、近日黃日仲詩有篇竹為椽之語、誤矣

李尊堂言云篇竹一尺數節、亦可作矢、葉大如扇、俗謂之簳、筍可以作籬

又云細竹若箭、可以作箭



山海經云美山云〻其陽多箭籀
又云壯山云〻其下多竹箭竹籀
又云暴山云〻其下多竹箭籀箘
廣雅云箭竹媚媚筑至也

釋名

箭竹 竹譜

案ふ箭と山海經のハ籀ふ作る廣雅及び玉篇ふ箭莫悲切竹名また籀美秘切長節深根者とそれぞれ
ことと江南のものハ桃節竹なりと既り竹譜ふい一る
ふ如〻

篻竹 全上

本書ハ江漢の方言なりと玉篇云篻苦怪切竹箭也然れとも此竹箭ハつくるつきものなりとて名づく

篻笥 全上

漢中の方言なりと玉篇云篻各干切、箭篻竹也笥 全上見之なりかて其義ハ去るべし

箭笻 太平御覽引竹譜

竹譜云箭竹漢江間謂之箭笻ニ見えたりと今本竹譜此文なしされとも箭笻といつるハ同意なり

竿簳

案ニ筍譜ニ竹譜ヲ引テ篙竹江漢間謂之竿簳ト見エ
太平御覽ニ引カハ其の江漢ト漢江ニ作リ竿簳ト箭
竿ニ作ル又玉篇ニ簳蘇旱切篙簳又簳ハ枇杖竹の名
ヲ見ルヲ如ク竿簳ハ篙竿の誤リトテ郭善長ハ其誤リト
ヒテ可ナラザルト

湘篙 劉中賦

案ニ湘ハ地名ニシテ篙ハ此葉の大カラザルヲ比シテ云

籤 廣雅

曹憲音至ニ見エタリ

十

正誤

彙書詳注云、篙竹高一尺大如廢

案ニ竹譜ニ篙竹一尺數節ニ至ルハ此竹の概節な
ルヲ云ヒテ篙ヲ廢ルヲ今高サ一尺ニ至ルハ誤リ
ナリト

さゝうを

さゝうをハ飛彈の国の溪間ニ生ス。竹筍の名ナリ此
竹ハ熊篠の類ニシテ幹細く葉大いなる其節間ヨリ毎竹
ニ似タレトモ一巨筍ヲ生シテ長サ五七寸圍ミ
二寸五分許狀細莫ニ似テ毎籜莫籜の如シ此即西土ニ

いちはや魚尾竹一名穿魚ともり此種ハ諸国時ふこれあ
るものとしつゝこれを飛弾国ニ産するもの殊ニ其名高し
されども皇朝の産ハもつて筍を幹中の節間ふ生じて
梢上の葉間ふハ生ぜざると異なるものを又或人の説ニ
さゝうをハ即木葉石の類ふて竹葉のおのをとゝ水中ふ
枯色落ちゝ年を経て遂ふ臭ふ化せしものゝ故ふ半體ハ
既ふ臭ふ化されども半体ハいまだ化せざるして竹葉の
まゝなるものもあるを此臭を産する所ハ飛弾の國
鎗の嶽あるをの澤渕にて之真のさゝうをなりとする
ハ即同名異物なり化を無情の有情ふ化する其類多け

竹譜詳錄載魚尾竹図

竹葉の魚の化する事あるがごとくあるがごとくなる事八真國人小尋ねて竹譜詳錄云魚尾竹西蜀功州西十里新白鶴山白鶴觀古者仙人四月九前得道之所真山生細竹葉上每一節赤有細籜左右相對一二寸許二籜亦對生如魚尾狀視之宛如細魚人傳九月九前釣魚具下折竹貫之遂成此種又名穿魚

釋名

さゝうを 飛騨国方言

此所小竹魚の義なる

臭尾竹　竹譜詳錄

名義本書ニ見エタリ

穿臭　上上

名義上ニ同シ

心誤

國文草木昆虫攷云サヽうをハ今處ゝにあるを陶穀清異錄云江湖有一種其葉糾結如蛇狀山民號曰蛇蛻竹即これなり

案ふさ〳〵臭ハ筍の狀臭尾の如くまさ〳〵細臭のごとき物なるゆへ今蛇蛻竹のその葉糾結して蛇のごとき

物と混同せしハ誤なり

くまさゝ　やきとんさゝ

くまさゝ一名うまさゝ一名やきとさゝ一名へそさゝ

さゝハ漢名と箬竹一名箬竹とつふ其幹矢竹より細ふして高九ゝ三四尺或ハ六七尺その三四尺のものハ每節相去ること三四寸ばかりして六七尺のものハそれに準して稍疎なるその枝ハまさに天竹の如く獨枝ふして長一幹中四枝或ハ五枝を生ず又一幹獨立して絶て枝なきものもその枝却て本幹よりも太きものをもつて一樣なるなり其葉ハ稍圧より横出して頗る傘

蓋の如し毎枝大抵六葉ふして下の一葉ハ甚た細小なれとも其餘の五葉ハ長大ふして長さおの〳〵七寸餘廣さ二寸許新葉ハもつて青色ふしてその正中ふ黄白色なる一縱道ありて葉本より葉先ふ至るその左右ハ相並ひて細十條路ありて共ふ二十條路葉本より葉先ふ至ること全く正中の一縱道ふ同しその老葉ハ葉の周囲皆三分許変白して恰も刀鍛の焼刃ふことなるかたちとその葉中ふ方解石の細小なるものを並つ〳〵如くふあるとなりなる極文となりてあり知漢三才図會ふ至秋出縱文黒黄白色甚美とつゝハ蓋し之をさして

つゝ〳〵なりて一種小さくあるさゝ其高六七寸或ハ一尺許ふして一幹ふ両三枝を生ずるものあれとまた本幹のみふして傍枝なきものあるとその頭ふおの〳〵五葉或ハ四葉をつく状くまさゝ小なる此葉もまたあきとき八青色ふして老るとき八葉辺一分許変白する事くまさゝふあるゝ又和漢三才図會ふくまさゝ焼葉さをもつて両種ニしてゆきをさゝハ其高不過尺といつるハ即この小くまさゝの事なりつゝ扨くまさゝハ諸國山中極めて多きものゝて江都ふも所ニふこれあり内ふ四石大木戸の前なる笹寺のその其若殊ふ高〳〵是ハ

寛永の頃御鷹狩の時この寺ふ立寄らせたまひしを
こふ小笹熊笹いと多かりしを見そなはし給ひて以
来ハ笹寺とよふつゝしと上意あるゝ江戸砂子ふ見
えたり今も方一坪程ふくまさくを植置しハ即その遺
跡かりとつたへ
和漢三才図会云馬篠葉大、一枝六七葉、其大者尺許廣二
寸、至秋出穎、文斑黄白色、甚美
増補地錦抄云焼葉笹ハくまさくのごとなる葉のへを
白くかゝり故やき葉とこゝふ
又云小くまさくハ熊笹のちいさきものなり

江戸砂子云笹寺ハ四石山長善寺とゝふ大木戸の前ふ
あり当寺を笹寺とゝふハ寛永の頃御鷹狩の時立寄ら
せたまふ当寺其頃ハ寺号もなく長善庵とゝふ菴室也
此所叢の中ゝて小笹隈笹深のゆゑを以て笹寺とよふ屋
ゝと叢命あるゝとなり和名抄ふ篠ハ小竹也
ゝて方一坪笹を植てかこ和なり
竹譜詳録云福州西郷安樂村有第竹、一稈葉大長三尺、廣
六寸餘
新安志云箬竹羅生葉大、可以苴裹
本經逢原云箬生小竹而葉最大、故可以之為笠

通雅云箬葉大可裹粽史篷者也

閩書南産志云箬葉竹其葉可以作篷

肇慶府志云箬葉如葦而葉極多舟人竹篷皆用俗呼次篷

葉

建昌縣志云箬竹幹小葉大篷笠之用

邵武府志云箬竹其幹高不過尋丈而葉獨大於諸竹今人以製船篷及籠皆出端午人家用以粽

南昌府志云箬竹幹小葉大可造篷笠

福寧州志云箬葉大可為篷莖如箭

杭州府志云箬竹与箬同葉長濶可為角黍

八閩通志云箬葉而大、舟人以絮蓬者

右本經逢原以下の引書ハ庶物類纂ふ引所とゝ以て再

ひらゝふ載せしなり

釋名

熊笹 庶物類纂 和漢三才図会、本草一家言

葉ゝ熊さゝゝゝ笹の意ゝて葉ふ眼あるふ倣りて名

つく

馬笹 和漢三才図会

馬ハ葉の大ゝゝふ倣りて名つく

燒葉笹 増補地錦抄

名義上ハ見えたれど和漢三才圖會よいちゐの燒菓笹
ハ即熊笹の一種小ちゐるものなれどこれと同名異物
なり

篁ちくさ　越前方言

此即篠笹の意なり

箭竹　竹譜詳錄　本草逢原

玉篇ハ箭而炙切竹大葉也翦同上と見えたり

ちまきさう

ちまきさうハ即白翦竹の一種なりとその幹極めて細く
して頗る箭の如く高さ三四尺其葉大抵六七葉を以て

一茎ニ長五寸餘廣一寸二三分毎葉をへて上ふ向て
下垂ること〻なく又年を經るといへども葉辺さらふ
変白せざるものハ即このさゝの性なり

釋名

ちまきさゝ　俗称

此葉角黍をつゝむかゝ〻故ふ此名あるをまゝ熊篠
小熊篠等とも所みなをてちまき笹こゝ〻とも亦角
黍をつゝむふ　よりて此をのふ拘るゝ〻ハ
ゆゑなり

五枚篠　ちのめさゝ

立枝篠一名豊後篠一名めかめさゝハ高さ一尺八九寸
より或ハ三四尺に至るその幹極めて細小なるこゝ
ろと毎節隆起するこゝ頗る稚竹のごとし此竹をへて
根上二三節より三枝或ハ四枝を分ちて三葉四葉を一
蓋ごとしそれより口上ハ毎節五枝を分ちて五葉を一蓋
ごとにその枝長さ四五分ばかりして二節めを葉ハ即その二
節上より生じて蓋となるを以てこれを熟視せざる時
ハ唯葉蓋のごとくして枝なきがごとし其稍上ハ至りてハ
きゝ三枝を生じ三葉を一蓋ごとなるこゝなり根上の二
三節ごとに枝根上の三葉節の左側より分て生ずる特

ハ其次の五葉ハ必ず節の右側ハ生じ二葉ハ左ハ向三
葉ハ右ハ向ふその右ハ向ふ三葉ハ中の一葉大ハして
左右の二葉ハ中ハ小さし其大なる一葉ハ左ハ向ふ二
葉の小さきハ根上の三葉ごとその大さ畧同しその葉の
状大抵雄竹ハ似て雄竹よりハ短くまゝ闊大ハして甚
薄しその軟きして葉のつくかゝ生扁ハして中ハ一線
路高く起り葉のつうさゝかゝハ全く四角なるこゝ常
竹ごとに一様なり今人此竹をこゝろ遷を去り箭ごとに甚く雅
趣あるまゝこの筍ハ四月の末五月の始ハ生じ状芽針
ゝ似て中ゝ扁たく其籜紅紫淡黄の両色相交りて別ハ

紅紫色の細縱道ありてこゝ全くはちくのごゝ〳〵

和漢三才図会云ハ枝篠高尺餘、葉深青色、似篠竹葉而短

毎莖五葉叢生、能繁茂、植庭院玩之

増補地錦抄云豊後笹ハくまざゝふ少〳〵似ておの〳〵

別なり

釋名

五枝篠 和漢三才図会

此篠毎節間五葉と生ずるを名づく

豊後篠 諸神地録

此篠もと豊後より来る故に名づく

あかめ竹 俗称

近時歳暮所々の市に福女の面を此篠に結付てひさぐ故に此名あり

正誤

和漢三才図会云五枝篠所謂或壬竹高止尺餘者此等之

類子

案ニ南方草木狀云越王竹根生石上、若細荻、高尺餘、南海有之、南人爰其青色用為酒筯云、越王事餘美而竹生、これかゝるなり越王竹ハ小竹なりといへども五枚篠の類にハ異なるもまれ一種越王筋竹あり竹譜詳錄の蕃異志を引て細如箭幹毎一節可省一筋故呼越王筋竹とえたれども此竹も五枚篠なるハ疑なるものなり

ささ

ささハ小竹の總名なりて漢名を箭といひ野ふあるを

野ささといひ叢ふあるを根ささといひ箱根山中ふ生もるを箱根ささといふ（稽神地錄）今處々の山野及ひ堤防上ふ數百本叢生し其高さ一二尺葉ハ女竹ふ似て甚小さし一種八丈篠あり其高さ僅ふ一尺ときに其葉尋常のものと相似たり今白河筑大坂の下邸ふあり此種ハ西土よりもたらしたるなり越後の田村ふ鎧櫃のさゝあり其高さ鎧よりも上ふ出る事ハしと（江戸砂子）いへり其他種類なり多し

古事紀（允恭天皇大御歌）云、佐ゝ婆（ささば）尓宇都（うつ）夜阿良（やあら）禮（れ）乃多志（のたし）陀志尓云ゝ

日本書紀　云篠此云佐々

萬葉集巻十一云、妹之髪上小竹葉野之

和名鈔竹類引蔣魴切韻云和名之乃一云佐々佐　細ニ竹也

江戸砂子云鎧摺の笹ハ上仁村若宮の近所本田寺ニ有

六七町ニ有ル北ニ有ル　八幡太郎義家奥州征伐

の時この所の笹の葉赤鎧ニ似て国上ニ有ル眺望のさ

まなり　此笹の文ニ見ル　かきりなく　この名ひしく

此笹のひたこいふ　今ハこのさまなり

竹譜詳録云一種出如蘇州嚴山中者極短高者不過二尺、

一枝三葉兄細可玩士人呼為趙篠

釋名

ささ　古事紀、日本書紀、万葉集　和名類聚鈔

さゝハ細小の義小石をさゝ石ニ小鱉をさゝかふ小浪

をさゝなみ　ものゝ類ハ皆ちいさきをさゝめくさて

ものゝ名ニ語ハ其義ハ上ニ

八丈篠　佐佐

この篠八丈島ニ来る故ニ名ツク

鎧摺笹　江戸砂子

笹ハ皇朝の作字なり

趨篠 竹譜詳錄

葉小趨ハ玉篇小際珍切履也ニこゝ[illegible]れを此篠矮小
して行路の人皆踐蹈して過行くへきゆゑを名つ
[illegible]

正誤

本草一家言云千里竹和名根篠（ネザサ）
葉小廣雅云似竹之小草有T（こゝ脫字）
寸葉似竹而孝似蘆根實草也蘆山不之可以降火
此說かゆゑを千里竹ハ軒似蘆根ものゆゑをその軒
根篠ようをいを至て太きものゆゑをされハ千里竹ハ別か

一種草かして根篠かいがらをもつて

龍鬚竹

龍鬚竹一名龍絲竹ハもとこ西土より来るその軒極めて
細小かして鍼のごとくまたく絲の如し高さ僅か八九寸
その葉まと細小わて結縛草か似たゆゑ此種ハ辰州か生
そゆゑ李草綱目ニ見えたれを今あるものを蓋し其
地の産るゆゑ又一種軒高さ六寸許ゆて根旁別か二
白鬚を生して其長本軒よりを五倍をものあり
竹譜詳錄か見えたれ共此種舶来ある事をきゆた
本草一家言云有龍絲竹生山陵莖細如絲

丹州因竹云、此小竹極細緻堪盆玩、一望似結縷草而直、親見群芳園中

竹譜詳錄云龍鬚竹又名龍須竹、生辰陽山谷間、高不盈尺、細僅如鍼、凡所以為竹者無不具、張得之譜云、予頃過一朋舊家、見盆池崑石上有小竹一竿、長六寸許、枝葉蒼翠、根旁別生二白須、盤屈水中、伸則長於鞋五倍、龍鬚之称疑於此、張南軒亦嘗移寘石罅中、養春生筍、森然可喜、因賦詩云、小竹如鍼能具體、方春茁筍又堪憐、者是也

李草冢言云龍鬚竹高盈尺、細如鍼、出鍼州

李草綱目云、辰州龍鬚竹、細僅如鍼、高不盈尺、其葉或細或

大

湧幢小品云辰州有龍鬚竹生山谷間高不盈尺細僅如鐵
和傳花鏡云龍鬚竹生辰州及浙之山石間高不盈尺而枝
幹細僅如針可作盆玩但過冬不可見霜雪
閩書南山志云辰州有一種小竹曰龍鬚竹生山谷間高不
盈尺細僅如針凡所以為竹無不具前輩詩有小竹如針能
具體即是也

釋名

龍鬚竹 竹譜詳錄本草綱目湧幢小品

案小龍鬚ハ即石龍鬚の龍鬚ニ同ジ此幹の細小なる

状頗る鬚の如くなるゆふよりて名つく

龍髭竹 全上

龍髭もまた龍鬚の意なるべ

正誤

湯殿小品云辰州有龍孫竹

圖書南産志云一種小竹曰龍孫

葉小孫まさに孫を作るべし蓋し傳写の誤なるべ又

華の一名を龍孫といへるハ山堂肆考に見えたり

児簾

児簾一名ちまさし一名やなぎ葉さしハ即龍須竹の一種

なり其高さ僅かに五六寸或ハ八九寸その葉細長頗る

棕櫚に似て毎葉青白色の細 (ホソクして) 佳麗愛玩すべし故

に人皆これを以て庭砌間の石傍或ハ小樹下に植てか

ざりとす其小樹下にあるとき年を経るものハ其樹と其

高低とあらそひて樹とし三尺許なるときハ此さしも

亦一二尺許に至るその三尺許のものハ大抵五節にし

てその梢上に五七葉をつけ或ハ一両枝を生ずるもの

あるとその枝幹並に細小にして恰も綿の如し

和漢三才図會云児簾高尺許葉最細長八九枝生於頂上

有白縐理如線青白相交甚可愛本草所謂龍鬚竹指此等

寸

増補地錦抄云児篠ハ葉ちいさきさゝなるゝ青き葉ハ白きをしあるをゝ成移美事なるゝ

釋名

児簾　和漢三才図会

此簾極めて細小かして且愛玩するきふようにて児簾と名づく

ゑゝまさ　俗称

國俗青黄布白ふ拘そらにまして細縱道あるものを以て ゑゝまさと称す此葉まさと青白縱道あり故ふゑゝまさと名づく

柵葉さく　本草一家言

此葉細長柵葉のごとし故ふ名づく

正誤

本草一家言云有辺白竹、葉辺皆白、和名知古篠
葉ふ辺白竹の名いまだ出ざるを知らたまゝ知古篠
はかるらを葉辺ふかきをて白きものあらを

桂園竹譜巻之五終

桂園竹譜附録

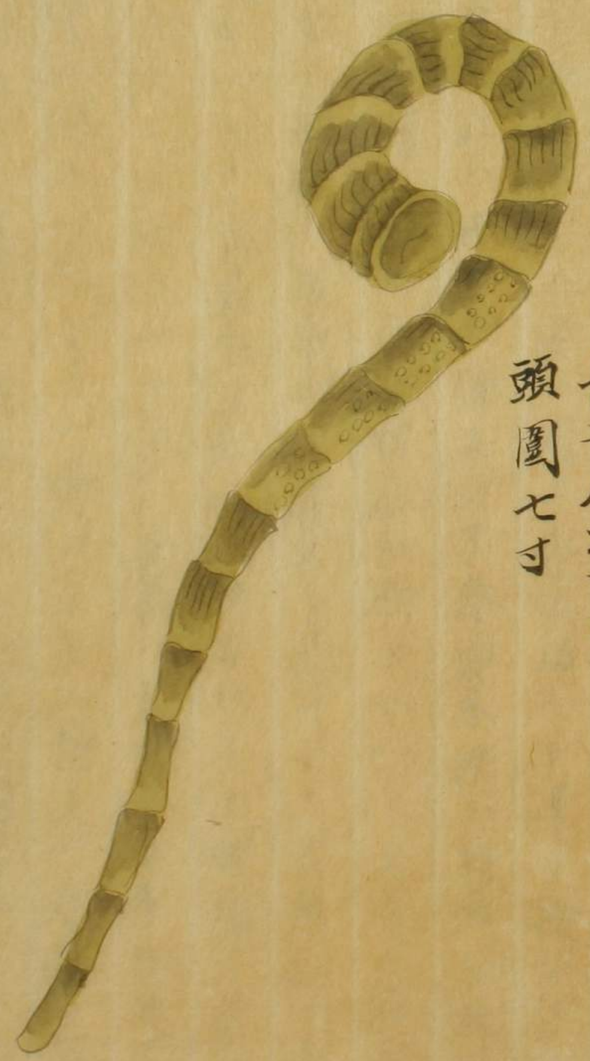
竹如意 大龍

竹如意ハ石川丈山ゝ藏せ〳〵所の珍奇物六品のうちの
一ツにてその長さ二尺六寸九分頭太く赤細〳〵その頭
屈曲して頗る象鼻の如く圍三七寸全體龍の趣あるを
故ふその名とまゝ大龍ともいつ節極めて密ふして
通計二十節その頭の九節下ふ二節下ふ至りて所竹
如意象鼻龍姿儒雅所執武將亦持中座以表心与何拔背
皆ゝ一ゝ廿六字の銘と二行ふちりたるものなり蓋し天
然のものなり

詩仙堂志版云石川丈山先生三河人也嘗仕　東照大神
君其位名著于世不朽矣浪華之役立先登功遂隱遁云〻
嘗於此地卜築幽栖方丈之堂掲古名詩者三十六人像題
其詩于上因歸日詩仙堂爭九十歲没于此矣美有三橋氏
成烈君者乃江都之武士而頃戍二條之城有暇則來尋先
生之遺蹤欲纂其幽居高風與一二同志寫詩仙之像洎六
物名器書畫之類悉皆因舊無遺錄云〻

詩仙堂志所載竹如意之圖

長二尺六寸九分
頭圍七寸



方竹刀

方竹刀一名忠孝全備竹一名天下一品竹ハ畫家雲舟ゟ
藏せし所にてその実ハ明の鄭成功ゟ手澤の物なりと
いつてこれハ正保の頃その子奏薊本邦ふ持来り故あ
りて河内國金田の人金田庄兵衛といへるものゝ家ゟ
客たりし時餓ふ彼成功の義兵を挙るよし告来れるふ
よりて中のて其家を立去ぬ此竹刀ハその時譲り置し
ものなりけり中の一ッにて其長一尺四寸五分切口よ
り五寸の所ふいたりて一節ありてその節ゟハ尋常の方
竹とかわらず周囲ふ鬚根となりて生き小田井あるとまた

突起して頗る星を列ねたるの如し全体さい唐ムさの
模様をなすため節下さい穏之則則折邪事則養性こい
へる八字の銘をなすなり此竹実心竹とかるしくその
潜極めて深く節の所多く周を三寸六分肉至て厚く竅
至て小さしその竅内さい上下共さ一條の細白線あり
ものい此竹の性多く実ふ天下の奇竹なり雲舟嘗て遊
歴の時筑紫に至りてをしめて此竹刀と見て心類りふ
後暮し遂ふ己ゝ帯ひし一刀さ代て強て譲をうけしい
寛政八年のころなりし和らふふ李息齋ゝ竹譜詳録
さ篇篇竹大如足指堅厚脩直腹中白膜闌陽状如澄麪生

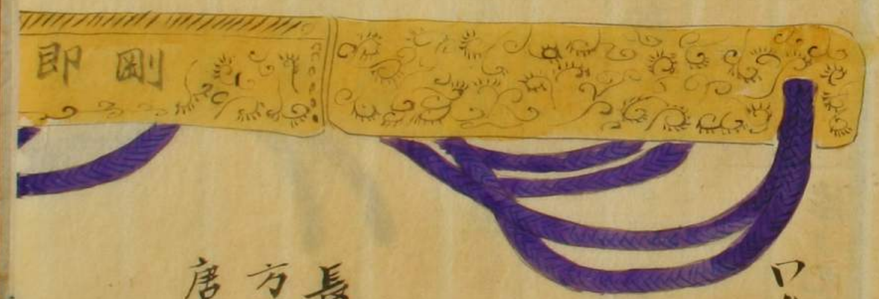
衣初生時紫色漸〻変紅年老則色白也こい〻るものい
蓋し此竹の類ふしなるなりなきなり
有栖川一品親王顕書云忠孝全備竹云〻この一ふしい
明國の忠臣なる鄭成功夫の讓りの品こ傳聞以諸ひと
も云へるなくふ成功ゝ又い唐國のなるこ母い我日
の本の肥の國多て成功を産るこも成功ゝさ多実ふ明
らふなるなる清國康熙の王ふも成功を延平鄭王こ
封して和こもつまふきこのなるを愛たき節ふそいあら
こもや
天下一品竹翁帖序云雲舟以画行于世蓋雪舟十一世流

亜最長山水人物、当人清稽雄辯、頗好議論、常佩方竹、以代
刀劔、請而覧之、古色蒼然、妙意不可二百年当周圍彫漆、
中有八字銘、書法正整、刻亦極工、夾節孔之二、以施紫繻、
二字疑らく八深字の工ふ方径一寸八分強、厚四分弱、修
移正 又夾字疑 ヒ
尺四寸五分、中當虛而有物、如長針貫節、而達兩崇節有小
星、環而羅列、數二十有八、上下象之天地、針象之大乙、星象
之二十八宿、注嶽賜　天覧、四方傳聞、爭往觀焉、名家賜詩
之頌、逐年成軸、於是珍賞愈加、曰天下一品竹云、昔朱明鄭
成功奉義兵之日、使子奏、節遣之、正保中来筥肥之松浦、憑
其廟祀也、奏節少有才頴、性嗜学、亦師於京、至河之金田、病

十

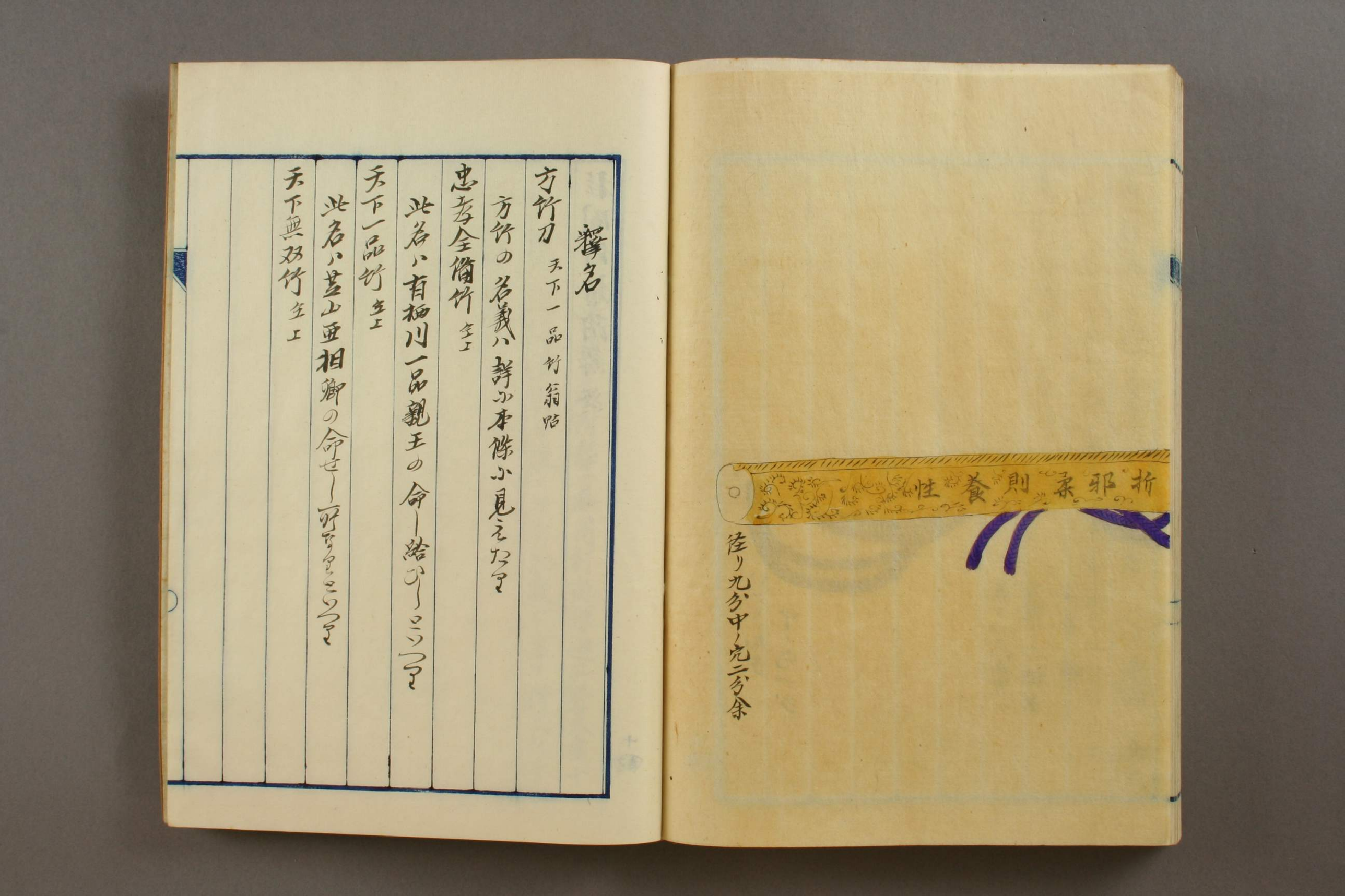
不能安、留而主橘行義之家、數月而愈、有女與之私焉、孕適
大清之信急、迎帰之、乃應招、倉卒赴之、以遂興復之志矣、臨
去衣服佩具、以遺其家、中有方竹一枝、小挺金二十一、竹乃
成功手澤物、傳至近時、特有故也、雲舟家藏、夫一物之微、托之
不朽、心由人而然、余嘗欽父子之義氣、英節、又称其僅得一
彈丸之地、臥薪嘗胆、中興学政也、意其賜　天覧、與得名家賜詩
之頌、蓋皆以貴彼父子之義、負、今一視之、愈益有感於懷云
因顧斯吉贈之、文政甲申仲夏、東都舊国、主人藤彝書於波
津官舎、憑雲舟画禅之需
金田庄兵衛諱状云、此竹八正保年中小國性節の　人我

家ニ持来リテ諸ヲ遣ヒそらく逗留いたし〜本國ニ其人
ハ帰らきたるを不思議の事ふて北度議をまねらさそ云ヒ
寛政八辰九月十三日 云ヒ



ロタリ九分
中ノ穴一分

長サ一尺五分ノ
方竹ナリ総體
唐草ノ彫アリ



長サ九分中ノ穴二分余

釋名

方竹刀　天下一品竹箱附

方竹の名義ハ詳ニ本條ニ見えたり

忠孝全備竹　全上

此名ハ有栖川一品親王の命ニ結ひしニツつ

天下一品竹　全上

此名ハ甚山亜相卿の命セシ所なりニツつ

天下無双竹　全上

桂園竹譜附錄終

右桂園竹譜五卷附錄一卷岡村尚謙遜所著本書十八卷今合冊粗訂正後日復當加校正焉于時天保十二年辛巳季冬日精々舍主人識

文藝